

4 ヒターノって？

ヒターノって？

フラメンコに関わると誰もが必ず耳にする言葉、ヒターノ。スペイン語でジブシーを意味します。独自の文化、価値観、習慣を持った人たちで、男性がヒターノ、女性はヒターナ。またカンテ・ヒターノ＝ヒターノのカンテ、コシーナ・ヒターナ＝ヒターノ料理といったように形容詞としても使われます。

起源はインド

ジブシーたちは北インドに起源を持ち、トルコや東欧諸国を経て、15世紀

にスペインにやってきたといわれます。ヒターノという呼び名は、最初彼らがエジプトから来たことと名乗ったことからエジプト(スペイン語でエヒプト)の人、エヒブターノがなまって、ヒターノとなったというのが定説です。ファラオナ、女ファラオという芸名がついたりするのもここから来ています。現在では言語やDNAから、インド起源だということは実証されています。愛知万博の時、パコ・デルシアの公演の待ち時間にグループのメンバーたちとインド館に行ったのですが、パーカッション奏者のピラーニャが飾っているインドの人たちの写真を見て「この子はい

とこに似ている、こっちは親戚のおじさんだ」と興奮していたのが印象的でした。何百年と言う時を経ても遺伝子はつながっているのですね。

差別用語？

ところで、日本のマスコミではジブシーという言葉が使われないのを知っていますか？「え、ホアキン・コルテスの『ジブシー・パッション』や映画『ジブシー・フラメンコ』とかテレビや雑誌でも記事見たよ〜」はい、映画や楽曲のタイトルでは使われます。でも、民族としてのジブシーと言う言葉は使われないのです。ジブシーという言葉は他者からの差別的な呼び方であるというのがその理由です。そのため、ロマと言いついて代えられています。が、ロマと言う言葉がまだ世の中に浸透されていないためロマ(ジブシー)とされるのが現状です。ロマとは彼らの言葉で人間、男を意味します。一方、スペインのヒターノという言葉には差別的な意味はあまりなく、自らもそう名乗っていますし、マスコミでも普通に使われています。

迫害の歴史

とはいっても、スペインではヒターノへの差別がなかったというわけでももちろんありません。移動の自由を奪われ、馴染んだ土地から追放されたり、奴隷のように苦役に処されたりと、長きにわたって迫害を受けてきたのです。この迫害の歴史を歌ったのが歌手レブリハーノのアルバム『ベルセクション』です。現在でも、差別が全くなかったわけではありません。身近なところでは有名なアーティストでもタクシーが止まってくれないことなどもあるそうです。

またナチスによるユダヤ人迫害は有名ですが、ヒターノたちも同じようにユダヤ人とともに収容所に送られ殺されていったことはあまり知られていません。



サクロモンテで踊るヒターノの子供
フランス人画家人ドレが描いた19世紀のスペイン紀行の本の挿絵から。幼い時からフラメンコの中で育つ彼らの強さ！



マヌエル・アグヘータ
ヒターノの中のヒターノと言われたマヌエルの母は非ヒターノでした。ヒターノかどうかは父系か母系かではなく本人の気持ち次第とはヒターノの友達の弁。ただ迫害の歴史上では父系がヒターノと判断していたそうです。

ヒターノのフラメンコ、非ヒターノのフラメンコ

ヒターノたちのフラメンコは、野生的、エネルギッシュ、神秘的などといった言葉で表現されることが多いようです。確かにヒターノたちだけが持つ独特の雰囲気や感覚はあるような？ファルコーコのパワーとアントニオ・ガデスの洗練、といったように対称的な存在もあります。が、ヒターノでもホアキン・コルテスのようにスタイリッシュな人もいるし、非ヒターノでも、トロンボのようなヒターノたちが認めるヒターノ以上にヒターノ的なアルティスタもいます。ヒターノだからいい、ヒターノじゃないからダメ、ということは全くありません。

フラメンコ＝ヒターノ？

少し前の辞書を見ると、フラメンコをジプシー芸能、と定義するものもあり、今でも個人のホームページではジプシー独自の芸能とっている人もあるようです。確かに、ヒターノという言葉はフラメンコとイコールで使われることも多いようですが、フラメンコはヒターノだけのものではありません。ヒターノなら誰でもフラメンコが得意というわけではありません。またスペイン国外のヒターノたちにはフラメンコの伝統はありません。

スペインでもフラメンコが生まれたのはアンダルシアだけです。その後各地に広がりましたが、今でもヒターノ、非ヒターノを問わず、アンダルシア出身のアルティスタが圧倒的に多いのはご存知の通りです。ヒターノなしにはフラメンコはありませんが、アラブや南米、アフリカの影響も受けたアンダ

ルシアの文化土壌がなければフラメンコは生まれていないでしょう。世界中にジプシーはいますが、それぞれ地域に根付き、その地の文化と混ざり合っており、それぞれの文化を作り出しています。東欧のジプシー・バイオリンやブラズバンドなども有名ですね。インドを出た中にもともと音楽家の一族がいたという話を思い出させます。

フラメンコの草創期の記録からもフラメンコにおけるヒターノの重要性は明らかですし、現在でも素晴らしいヒターノのアルティスタは数多くいます。ただヒターノではなくてもすぐれたアルティスタがたくさんいるのも本当です。

なお、アンダルシアのヒターノは東欧経由だけでなく、北アフリカ経由でも入ってきており、また、同じように差別迫害されていたユダヤ系、イスラム系、黒人系などの一部も吸収していると言われるので、ヨーロッパの他の国と比べても独特なのかもしれません。



89のしかぜ
セビージャにあったベニヤ・エル・ボージョでトマティートと。カマロンのアルバム『ソイ・ヒターノ』を録音中でした。

志風恭子/1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デ・ルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。



マリア・ソレア、ラ・ネグラ、フェルナンダ・デ・ウトレラ、ラ・トレア、マリア・ラ・ブーラ。ヒターノのアルティスタたちは結婚で舞台から引退する人も多かったのですが、年を経て復帰する場合もあります。最近では家庭との両立も珍しくありません。